

福井県埋蔵文化財調査報告 第180集

北 横 地 中 才 遺 跡

— 北陸新幹線建設事業に伴う調査9 —

2 0 2 2

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県埋蔵文化財調査報告 第180集

北 横 地 中 才 遺 跡

— 北陸新幹線建設事業に伴う調査9 —

2 0 2 2

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

このたび、北陸新幹線建設事業に伴って平成 30 年度に発掘調査を実施しました北横地中才遺跡の調査成果がまとまり、福井県埋蔵文化財調査報告第 180 集として刊行することとなりました。

北横地中才遺跡は坂井市丸岡町北横地に位置し、これまで古墳時代および中世の遺物散布地として知られていました。今回初めて本格的な発掘調査を実施し、弥生時代から古墳時代にかけての溝と、平安時代から鎌倉時代にかけての建物と区画のための溝、井戸などが確認されました。井戸からは箸・曲物などの木製品やかかわらけのほか、当時は貴重品であったと思われる、中国製の白磁碗も出土しました。

今後、この報告書の成果が各方面で広く公開・活用され、埋蔵文化財に対するご理解を深めていただく機会となるとともに、地域の歴史研究の進展に寄与できれば、誠に幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様から多大なご支援とご協力を賜りましたことを、深く感謝申し上げます。

令和 4 年 3 月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所 長 中 川 佳 三

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが、北陸新幹線建設事業に伴い、平成30年度に実施した北横地中才遺跡（福井県坂井市丸岡町北横地所在）の発掘調査報告書である。
- 2 北横地中才遺跡の調査は、独立行政法人鉄道運輸機構の依頼を受け、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、櫛部正典、安達俊一、宮澤多紀が担当した。
- 3 発掘調査の支援業務は、吉田建設株式会社および国際文化財株式会社に委託した。
- 4 発掘調査は、平成30年5月1日から同年8月31日まで実施した。
- 5 本書の執筆・編集は安達がおこなった。自然科学分析に関しては、株式会社吉田生物研究所が作成した報告書を編集して掲載した。
- 6 北横地中才遺跡に関するこれまでの成果のうち、本書と齟齬のある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 7 検出土構の写真撮影は、櫛部、安達がおこなった。出土遺物の図化・写真撮影および図版作成は安達がおこなった。
- 8 本書に掲載した遺構図版の一部は、株式会社吉田建設および国際文化財株式会社に委託して作成したものを、一部改変して使用した。また、上空からの写真は株式会社吉田建設および国際文化財株式会社が撮影したものである。
- 9 遺物図版と写真図版などの遺物番号は符合する。写真の縮尺は不同である。
- 10 遺構図版における水系レベルの表示は、標高（m）を示す。X・Y座標値は、国土平面直角座標第VI系に基づき、方位は座標北である。
- 11 土層および土器の色調は、『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修）に基づく。
- 12 木製品の保存処理および樹種同定・年代測定は、株式会社吉田生物研究所に委託した。
- 13 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 14 発掘調査ならびに本書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご教示を頂いた（五十音順、敬称略）。
岩田 隆 中原義史
- 15 発掘調査には、地元の方々のご参加・ご協力を得た。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの職員および整理作業員が当たった。
- 16 本調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「キタナカ」とした。

目 次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 地理的・歴史的環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の概要	8
第1節 調査の概要	8
第2節 基本層序	11
第4章 遺構・遺物	12
第1節 遺構	12
第2節 遺物	22
第5章 自然科学分析	29
第1節 樹種同定	29
第2節 年代測定	33
第6章 まとめ	35
第1節 中世の遺跡の時期と集落の変遷	35
第2節 坂井平野における古代から中世前期の遺跡について	36

写真図版目次

図版第1 遺跡	図版第3 遺構 掘立柱建物
(1) 遺跡遠景	(1) SB1 完掘状況
(2) 遺跡遠景	(2) SB4 完掘状況
図版第2 遺跡	図版第4 遺構 溝
(1) 調査区全景	(1) SD3 完掘状況
(2) 調査区南部 近景	(2) SD3 柱痕近景

(3) SD 4 完掘状況	(2) SE 5 断面
(4) SD 5 完掘状況	(3) SE 5 完掘状況
図版第 5 遺構 溝・井戸	(4) SE 6 断面
(1) SD 6 完掘状況	(5) SP 1～3 完掘状況
(2) SE 1 曲物検出状況	(6) SP 4 完掘状況
(3) SE 1 曲物下部	(7) SP 5 完掘状況
(4) SE 2 断面	図版第 7 遺物 土師器
(5) SE 2 遺物出土状況	図版第 8 遺物 中世土師器・陶磁器
(6) SE 3 断面	図版第 9 遺物 木製品
(7) SE 2・3 完掘状況	図版第 10 遺物 石製品・木製品・縄文土器
(8) SE 4 曲物検出状況	図版第 11 遺物 土師器・土製品・須恵器
図版第 6 遺構 井戸・ピット	図版第 12 遺物 中世土師器・陶磁器
(1) SE 4 底板検出状況	

挿 図 目 次

第 1 図 調査区位置図	1	第 14 図 SP 1～5 実測図	21
第 2 図 地形区分図	3	第 15 図 土器実測図	22
第 3 図 遺跡分布図	6	第 16 図 土器実測図	23
第 4 図 調査区全体図	8	第 17 図 石製品実測図	23
第 5 図 遺構分布図 1	9	第 18 図 木製品実測図	23
第 6 図 遺構分布図 2	10	第 19 図 土器・土製品実測図	25
第 7 図 層序模式図	11	第 20 図 土器実測図	26
第 8 図 SB 1 実測図	13	第 21 図 顕微鏡写真 1	30
第 9 図 SB 2・3 実測図	14	第 22 図 顕微鏡写真 2	31
第 10 図 SB 4 実測図	15	第 23 図 顕微鏡写真 3	32
第 11 図 SD 3～7 実測図	17	第 24 図 顕微鏡写真 4	33
第 12 図 SE 1・4 実測図	19	第 25 図 福井平野における 8～13 世紀の	
第 13 図 SE 2・3・5・6 実測図	20	遺跡・荘園分布図	38

表 目 次

第 1 表 周辺の遺跡一覧表	7	第 6 表 木製品樹種同定結果	29
第 2 表 土器観察表 1	27	第 7 表 測定試料および処理	33
第 3 表 土器観察表 2	28	第 8 表 年代測定および暦年校正の結果	34
第 4 表 石製品観察表	28	第 9 表 福井平野における遺跡の消長表	39
第 5 表 木製品観察表	28		

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

北陸新幹線は、東京から北陸地方を経て大阪に至る路線として、昭和48年に国の整備計画が決定され、平成9年に高崎・長野間が、平成27年に長野・金沢間が営業運転を開始した。残る金沢・大阪間のうち、福井駅部については平成17年に、金沢・敦賀間については平成24年に工事実施計画が認可され、福井県内でも工事を開始した。

福井県教育庁生涯学習・文化財課では、金沢・敦賀間の工事により影響を受ける埋蔵文化財の取り扱いについて、事業主体である独立行政法人鉄道運輸施設整備機構、福井県総合政策部新幹線建設推進課との間で協議をおこなってきた。その結果、埋蔵文化財に影響を与える可能性のある箇所については内容把握のための確認調査（1次調査）を実施し、必要に応じて記録保存のための発掘調査（2次調査）や工事立会を実施することとなった。各調査は、独立行政法人鉄道運輸施設整備機構が福井県教育庁生涯学習・文化財課に委託し、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施することとなった。

北横地中才遺跡においては、平成28年10月4～7日に本線部分の1次調査を実施したが、埋蔵文化財は確認されず、慎重工事対応となった。平成29年7月13日～12月20日には、変電施設建設に伴い19,576㎡を対象に1次調査を実施した。その結果、遺構・遺物を確認し、7,560㎡について2次調査が必要と判断した。



第1図 調査区位置図（縮尺 1/5,000）

第2節 調査の経過

現地調査は、平成30年5月1日～8月31日に実施した。4月下旬から重機による表土剥ぎおよび発掘調査支援業務の受注業者との打ち合わせなどをおこない、5月中旬から本格的に作業を開始した。5～7月は、人力での表土除去、精査、および検出した遺構の掘削を随時実施した。7月末から調査区内の清掃などを開始し、8月7日に全景撮影、空中写真撮影・測量を実施した。撮影後、井戸の断ち割りなどの補足調査および片付けを実施し、8月末に調査を終了した。

整理作業は、令和2・3年度に福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。また、外部委託として、出土木製品の保存処理および樹種同定・年代測定を令和2年度に実施した。整理作業と並行して原稿執筆・図版作成などを実施し、令和4年3月に本報告書の刊行をもって、北横地中才遺跡の発掘調査を完了した。

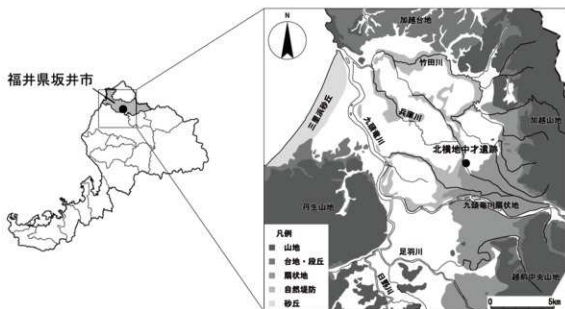
第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

北横地中才遺跡は、福井市街から九頭竜川を越えて北北東に約8km、丸岡市街から南西に約2.5kmの地点にある。現在の行政区分では、坂井市丸岡町北横地にあたり、いわゆる平成の大合併前には坂井郡丸岡町に属していた。旧坂井郡域は県内でも有数の穀倉地帯であり、遺跡は北横地集落北側の水田地帯にある。

遺跡の位置する福井平野⁽¹⁾は、九頭竜川、足羽川、およびそれらの支流が形成した沖積平野である。北を加越台地、東を加越山地と越前中央山地、南を丹生山地に囲まれ、西は日本海に面している。海岸部には砂丘が形成され、東側には扇状地が発達している。

福井平野の九頭竜川以北の地域は、坂井平野とも呼ばれる。坂井平野では、九頭竜川の支流である竹田川や兵庫川などが形成した自然堤防が発達しており、多くの遺跡が立地する。北横地中才遺跡の北側には、兵庫川が南東から北西方向に蛇行しながら流れており、もともとは兵庫川の自然堤防上に立地していたと推測される。ただし、周辺は昭和40年代に耕地整理がおこなわれており、現状で微高地は確認できない。周辺の標高は9m前後である。



第2図 地形区分図 (縮尺 1/300,000)

第2節 歴史的環境

縄文時代 舟寄遺跡では中期の堅穴建物19棟、土坑96基などを検出しており、環状集落と推定されている。沖布目北遺跡では平成9年の工事立会の際、後期の包含層と土坑・柱穴を確認している。舟寄福島通遺跡では晩期の埋設土器と柱穴を、若宮遺跡では晩期の土坑を検出した。

弥生時代～古墳時代前期 弥生時代前期の遺跡は明確ではない。弥生時代中期の遺跡としては、舟寄福島通遺跡、沖布目北遺跡、長崎遺跡がある。舟寄福島通遺跡では方形周溝墓を検出した。沖布目北遺跡では工事立会の際に土器と玉作関連遺物が出土した。長崎遺跡では坂井市による試掘調査の際に矢羽根状沈線をもつ壺が出土した。弥生時代後期～古墳時代前期の遺跡は多く、石盛遺跡、若宮遺跡、寄安・栗森遺跡、舟寄福島通遺跡、北横地森里遺跡、高柳・下安田遺跡、上安田向田遺跡で遺構・遺物を確認している。石盛遺跡では弥生時代後期の幅3m、深さ1.2mの断面V字形の溝を検出しており、環状集落と推定されている。舟寄福島通遺跡、高柳・下安田遺跡では玉作関連遺物が出土し、集落内での玉生産をおこなっていたことがあきらかとなった。また、高柳・下安田遺跡では銅鐸片や発泡した土器が出土しており、集落内で青銅器の鋳造をおこなっていたと想定されている。上安田向田遺跡ではヒスイ製勾玉・ガラス製小玉などの出土から、墓域の存在が想定されている。

古墳時代中・後期 中期の遺跡としては、石盛遺跡、宮領遺跡、河合寄安遺跡、舟寄福島通遺跡がある。石盛遺跡では堅穴建物・掘立柱建物・溝を検出した。河合寄安遺跡では堅穴建物と自然河川を検出し、井泉遺構からは木製祭祀具が出土した。舟寄福島通遺跡では井戸を検出し、包含層から5世紀中頃の須恵器坏蓋が1点出土した。後期の遺跡としては、若宮遺跡で自然河川から土師器・須恵器が出土し、宮領遺跡、舟寄本廟遺跡、高柳・下安田遺跡、上安田向田遺跡でも少量の土器が出土したが、遺構は明確ではない。

古代 石盛遺跡では9世紀を中心とする時期の掘立柱建物・井戸・溝・土坑を検出した。ほかにも遺物が散発的にみついている遺跡はあるが、遺構は明確でない。古代の北陸道は付近を通っていたと想定されるが、具体的な位置は不明である。なお、舟寄集落には幕末に建てられた北陸道の道標が、北横地集落には一里塚の跡がある。

中世 若宮遺跡では15世紀後半～16世紀前半を中心とする時期の井戸を204基検出し、村落における共同水場的な性格が想定されている。舟寄築山遺跡・舟寄本廟遺跡では、掘立柱建物と区画溝を検出し、溝からは13世紀後半～14世紀初頭の投棄された大量のかわらけが出土した。長崎遺跡では、遺跡南部における県道関連の調査において中世の遺構・遺物を多数検出した。寄安・栗森遺跡では、中世前期とみられる掘立柱建物・土坑を検出した。高柳・下安田遺跡では中・近世とみられる井戸を5基検出した。中世城館としては、石盛遺跡、正蓮花館跡、舟寄城跡、長崎城跡がある。石盛遺跡では14～16世紀の新旧2条の堀と、堀で区画された内部から掘立柱建物・井戸・溝を検出し、『太平記』などに記載がある石丸城と推定されている。長崎遺跡では新幹線関連の調査において、堀・掘立柱建物・井戸・溝を検出しており、南北朝期に南朝方の拠点のひとつであった長崎城に関連するものとみられる。正蓮花館跡は朝倉近江守の館、舟寄城跡は朝倉家臣黒坂備中守の館と伝わるが、調査はおこなわれておらず詳細は不明である。

註

- 1 地形区分および名称は下記の文献に基づく。また、第2図は同文献の図191を基に作成した。
吉田森 1970「福井県総説 Ⅲ-1、地形」『日本地誌 第10巻』二宮書店
- 2 三澤繁忠 1997「石盛遺跡」『遺跡発掘事前総合調査Ⅱ 開発遺跡・高柳遺跡・石盛遺跡』福井市教育委員会
清水孝之 2013『石盛遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
田邊朋宏 2014『石盛遺跡』福井市教育委員会
福井市文化財保護センター（編）2015『石盛遺跡Ⅱ』福井市教育委員会
- 3 福井県立朝倉氏遺跡資料館（編）1987『福井県の中・近世城館跡』福井県教育委員会
- 4 齋藤与次兵衛（編）1973『坂井町誌』文殊立性
仁科章 2007「宮領遺跡」『新修坂井町誌 通史編』坂井市
- 5 山本孝一・富山正明・赤澤徳明・木村孝一郎 2012『若宮遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 6 福井市文化財保護センター（編）2012『寄安遺跡発掘調査報告書Ⅰ』福井市教育委員会
田中勝之 2017「5、寄安遺跡」『第32回福井県発掘調査報告会資料』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
山本孝一・吉田悠歩 2019『寄安・栗森遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
田中勝之 2020「5、寄安・栗森遺跡」『第35回福井県発掘調査資料』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 7 福井市文化財保護センター（編）2011『河合寄安遺跡発掘調査報告書Ⅰ』福井市教育委員会
- 8 赤澤徳明・山本孝一・田中勝之・パレオ・ラボ分析グループ 2011『舟寄福島通遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 9 山本孝一・田中祐二・古山明日香・丸山真史・黒澤一男・新山雅広・パレオラボ AMS年代測定グループ 2013『舟寄遺跡』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 10 佐々木芽衣 2022『舟寄築山遺跡・舟寄本廟遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 11 青山航 2017『長崎遺跡』坂井市教育委員会文化課
秋山綾子 2017「2、長崎遺跡」『第32回福井県発掘調査報告会資料』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
野路昌嗣 2020「5、長崎遺跡」『第35回福井県発掘調査資料』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
柳部正典 2021「2、長崎遺跡（3～5区）」『第36回福井県発掘調査報告会資料』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 12 金元賢治 1995「森里遺跡」『第10回福井県発掘調査報告会資料』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 13 赤澤徳明・田中勝之・御嶽貞義 2010『高柳・下安田遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 14 赤澤徳明 2008『上安田向田遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
堤徹也 2006『松木遺跡』丸岡町教育委員会



第3図 遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)

第1表 周辺の遺跡一覧表

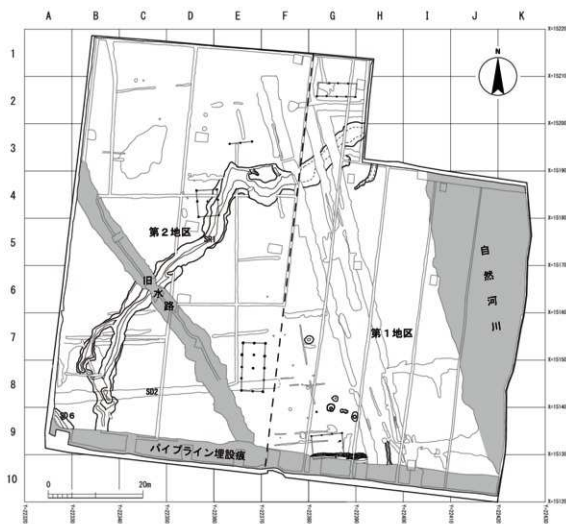
番号	遺跡名	種別	時代	文献
01080	石盛遺跡	集落跡・館跡	弥生～近世	2・3
11063	東長田遺跡	散布地	縄文・弥生・奈良～近世	
11064	上新庄遺跡	散布地	弥生・古墳・中世	
11065	堀島遺跡	散布地	弥生・古墳・奈良～中世	
11066	堀島小縄遺跡	散布地	弥生・奈良・平安	
11067	宮領遺跡	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	4
11068	若宮遺跡	集落跡	縄文～古墳・平安・中世	5
11069	田島遺跡	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	
11070	田島孤嶺遺跡	散布地	奈良・平安	
11072	田島窪五ヶ遺跡	散布地	弥生・奈良・平安	
11073	田島窪遺跡	散布地	弥生・奈良・平安	
12025	大針遺跡	散布地	古墳・奈良・平安	
12041	為国遺跡	散布地	古墳・奈良・平安・中世	
12042	沖布目北遺跡	散布地	縄文・弥生・平安・中世	
12043	沖布目遺跡	散布地	縄文・弥生・奈良・平安	
12044	石仏遺跡	散布地	中世	
12045	中筋水久保遺跡	散布地	中世	
12046	中筋高湯遺跡	散布地	古墳・中世	
12047	正業北条路遺跡	散布地	弥生・奈良・平安	
12048	中筋遺跡	散布地	奈良～中世	
12049	正業花館跡	館跡	中世	3
12050	寄安・栗森遺跡	集落跡	縄文～中世	6
12051	河合寄安遺跡	集落跡	古墳・平安	7
12021	福所旧戸遺跡	散布地	古墳・奈良・平安	
12022	一本田福所遺跡	散布地	古墳・奈良・平安	
12023	福所何田遺跡	散布地	弥生・古墳	
12024	福所大坪遺跡	散布地	奈良・平安	
12025	千田純田遺跡	散布地	弥生・古墳	
12026	舟寄福通遺跡	集落跡・墳墓	縄文～古墳	8
12027	舟寄遺跡	集落跡	縄文～近世	9
12028	舟寄正明遺跡	散布地	弥生・古墳・奈良～近世	
12029	舟寄柳地袋遺跡	散布地	古墳	
12030	舟寄築山遺跡	散布地	古墳・中世	10
12031	一本田野中遺跡	散布地	古墳	
12032	舟寄本瀬遺跡	散布地	古墳～平安	10
12033	舟寄城跡	城跡	中世	3
12034	一本田遺跡	散布地	弥生・古墳・中世・近世	
12035	長崎城跡	城跡	中世	3
12036	長崎遺跡	集落跡	平安～中世	11
12037	一本田清水ヶ上遺跡	散布地	平安～中世	
12038	四ツ屋舟寄遺跡	散布地	古墳	
12039	北横地中才遺跡	散布地	古墳・中世・近世	
12040	四ツ屋南遺跡	散布地	古墳・奈良・平安	
12041	北横地石橋遺跡	散布地	古墳・奈良・平安・中世	
12042	長崎佐屋栄遺跡	散布地	中世・近世	
12043	八ツ口・古政遺跡	散布地	古墳・奈良・平安・中世・近世	
12044	北横地森田遺跡	散布地	古墳・奈良・平安	12
12045	八ツ口中樋爪遺跡	散布地	奈良・平安	
12046	八ツ口南平遺跡	散布地	古墳	
12047	實田遺跡	散布地	奈良・平安	
12048	高柳・下安田遺跡	集落跡	弥生～近世	13
12049	下安田岸ノ下遺跡	散布地	古墳・中世	
12050	南横地遺跡	散布地	古墳	
12051	下安田高ノ下遺跡	散布地	古墳・奈良・平安	
12052	羽板郷ヶ島遺跡	散布地	奈良・平安	
12053	牛ヶ島遺跡	散布地	不詳	
12054	安田新遺跡	散布地	奈良・平安	
12055	上安田向田遺跡	集落跡	弥生～平安	14
12057	反保柳町遺跡	散布地	奈良・平安	
12058	上安田・八丁遺跡	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	
12059	四ツ柳森店遺跡	散布地	古墳・奈良・平安・中世・近世	
12060	磯部福庄遺跡	散布地	弥生・古墳	
12061	八丁遺跡	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	
12062	丸岡城跡	城跡	近世	

第3章 調査の概要

第1節 調査の概要

調査にあたり、10m×10mのグリッドを設定した。グリッドは、国土平面直角座標に沿って設定し、名称は、西から東へA・B・C…、北から南へ1・2・3…の順に付した。

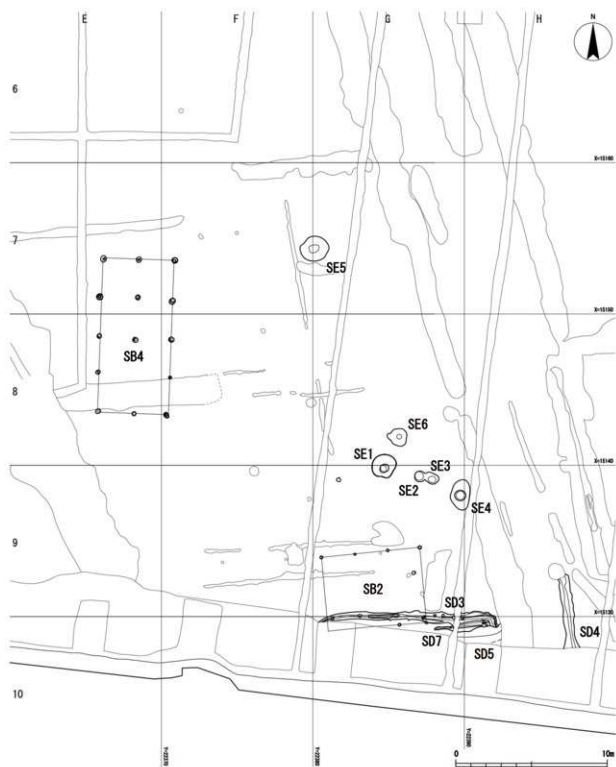
調査区内は全体が削平されていることに加え、カクランも多く、遺構の遺存状況は極めて悪い。大規模なカクランとして、自然河川、水路、農業用パイプライン埋設痕がある。自然河川は、調査区の東側を北流するもので、昭和30年代以前の地形図や、昭和23年米軍撮影の空中写真にもみえる。水路は、位置関係から北横地と長崎を結ぶ旧道の脇にあったものと推測する。水路の埋土にはビニールや土壌などが混じり、昭和40年代におこなわれた耕地整理の際に埋め立てられたとみられる。農業用パイプラインは、九頭竜川下流土地改良事業によるものであり、平成15年に福井県埋蔵文化財調査センターが試掘調査済みの箇所である⁽¹⁾。



第4図 調査区全体図（縮尺 1/800）



第5図 遺構分布図1 (縮尺 1/250)



第6図 遺構分布図2 (縮尺 1/250)

遺構は、弥生～古墳時代の溝、中世の掘立柱建物・溝・井戸・ビット、時期不明の掘立柱建物を検出した。弥生～古墳時代の遺構は、調査区の南西隅、中世の遺構は、南側中央に集中しており、遺跡の中心は調査区の南～南西側に広がっていたと推測する。一部の遺構および弥生時代以前の自然河川（SR1）から縄文時代晩期の土器が若干出土したことから、縄文時代の遺構が存在した可能性もある。

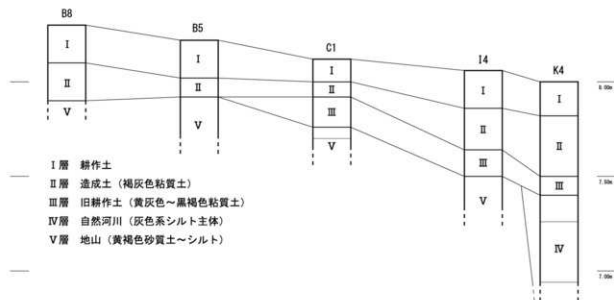
遺物は調査区全体でみられたが、遺構出土のもの以外はすべてカクランおよび表土（造成土・旧耕作土）から出土した。時期は、縄文時代晩期～近現代のものがあるが、弥生時代後期～古墳時代前期、中世、および近世以降のものが多い。遺物の分布状況を見ると、東側（第1地区）では比較的中世の遺物が多いのに対し、西側（第2地区）では比較的中世の遺物が多く、遺構の分布と同様の傾向を示す。

第2節 基本層序

基本層序は、上から水田耕作土、耕地整理の際の造成土、旧耕作土、地山に区分される。遺物包含層は確認されず、遺構はすべて地山上面で検出した。旧耕作土は、地山面が低くなっている北側でのみみられる。南側の地山と北側の旧耕作土上面は、自然河川のある東側を除いて標高 7.9m前後とほぼ一定で、耕地整理の際に全体が同じレベルまで削平されたとみられる。遺構の分布とも併せて考えると、原地形は南側が現状の地山面よりも高く、微高地状になっていたと考えられる。

註

- 1 赤澤徳明 2008「平成11～15年度の北陸農政局九頭竜川下流土地改良事業関連の試掘調査について」『上安田向田遺跡』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター



第7図 層序模式図

第4章 遺構・遺物

第1節 遺構

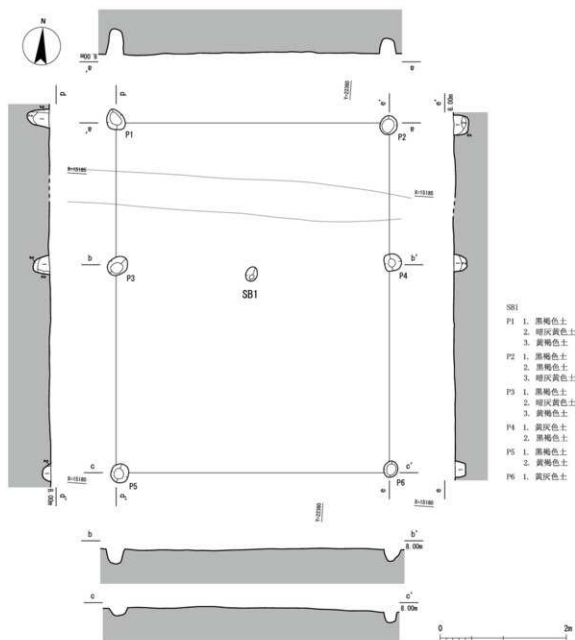
1 掘立柱建物

SB1 (第8図) D4・E4グリッドで検出した。規模は桁行5.5m(2間)×梁行4.3m(1間)である。桁行方向はN-4°-Wである。柱穴の掘方は平面円形もしくは楕円形で、径26～36cm、深さは11～40cmである。桁行方向の柱間寸法は、北側が2.2m、南側が3.3mである。やや並びが悪いが、P3とP4の間に浅いピットがあり、束柱の可能性がある。出土遺物はないが、周辺で中世の遺物が出土しており、時期は中世と推測する。

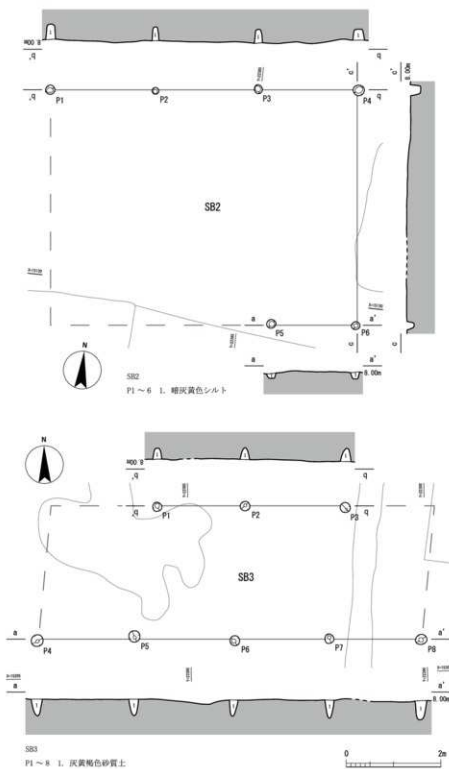
SB2 (第9図) G9・G10グリッドで検出した。規模は桁行6.5m(3間)×梁行5.0m(1間)である。桁行方向はN-84°-Eである。P6から中世のかわけが1点出土しているが、混入と考える。時期は、中世の遺構埋土とはあきらかに異なっており、おそらく近世以降と推測する。

SB3 (第9図) G2グリッドで検出した。規模は桁行8.1m(4間)×梁行2.8m(1間)である。桁行方向はほぼ東西である。出土遺物はないが、中世の遺構埋土とはあきらかに異なっており、おそらく近世以降と推測する。

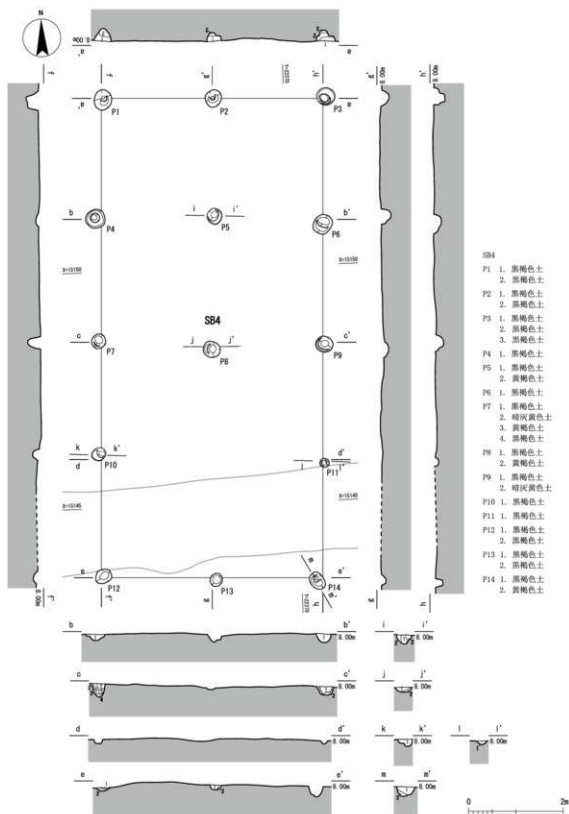
SB4 (第10図) E7・E8・F7・F8グリッドで検出した。規模は桁行10.0m(4間)×梁行4.8m(2間)である。桁行方向はN-2°-Eである。柱穴の掘方は平面円形もしくは楕円形で、径20～43cm、深さ9～28cmである。P10とP11の間では柱穴を検出できなかったが、遺構面が大きく削平されていることを考慮すると、もともとは存在した可能性もある。そのように考えた場合、総柱の掘立柱建物となる。出土遺物はないが、近接して築かれた井戸(SE5)から11世紀末～12世紀前半の白磁が出土しており、同時期と推測する。



第8圖 SB1 実測図 (縮尺 1/60)



第9図 SB2・3実測図 (縮尺 1/80)



第10圖 SB4実測図 (縮尺 1/80)

2 溝

検出した溝には、中世の堀もしくは槽と推定するもの（SD3・7）、中世の区画溝と推定するもの（SD4・5）、性格不明の古墳時代前期のもの（SD6）がある。

なお、調査時にSD1としていたものは、弥生時代以前の自然河川であることが判明したため、名称をSR1へと変更した。また、SD2は近世の遺物を含むカクランと判明したため、これらについての報告はおこなわない。

SD3（第11図） G9・G10・H9・H10グリッドで検出した。規模は、長さ11.7m、上幅52cm、底面幅14cm、深さ32cmである。主軸方向はほぼ東西である。東端は南側に曲がるが、その先でSD5に切られる。西端も南側に曲がる可能性があるが、カクランに切られており判然としない。溝の完掘時に底面で柱痕を検出しており、おそらく布掘りを伴う堀もしくは槽と考える。遺物は、中世のかかわり（第16図12～16）と陶器の細片が出土した。

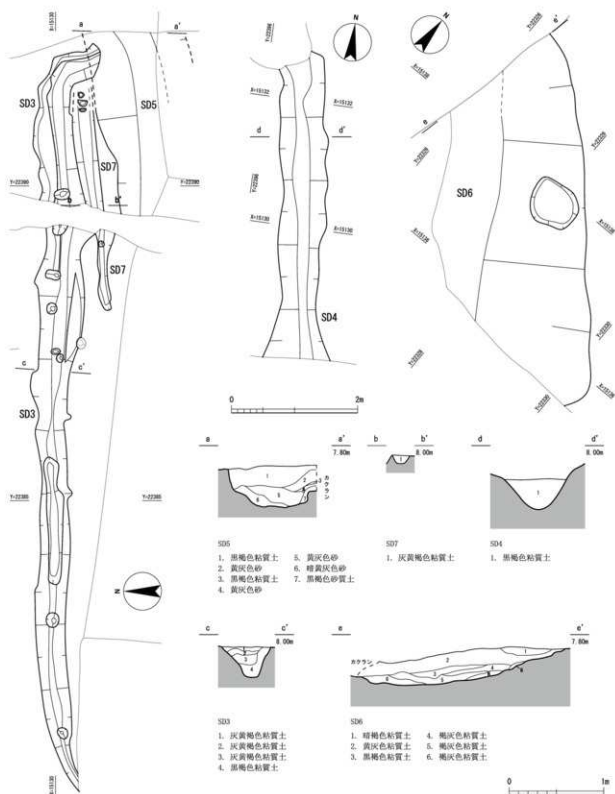
平面的には確認できなかったが、土層断面および柱痕の位置関係から、2条の溝が切り合っていると判断した。古い段階の溝（断面4層に対応）はおおよそ1～2m間隔で柱痕があり、東端は南へ曲がる。埋土には焼土・炭を含む。新しい段階の溝（断面1～3層に対応）は、溝の中心からやや北側に外れる柱痕が対応するものと考ええる。およそ0.6～0.7m間隔で柱痕があるが、延長は不明である。構造物の建て替えや修理に伴う痕跡と考える。

SD4（第11図） H9・H10グリッドで検出した。規模は、長さ4.9m、幅65cm、深さ32cmである。主軸方向はN-8°-Wである。南側の延長はカクランのため不明である。遺物は、中世のかかわり（第16図17）・越前焼（第16図18）、縄文土器（第19図32）が出土した。SD5とほぼ直交方向に延びることから、同時期に機能していた区画溝と推定する。

SD5（第11図） H10グリッドで検出した。規模は、長さ3.0m、上幅1.5m以上、底面幅56cm、深さ45cmである。主軸方向はN-83°-Eである。SD3を切る。両端はカクランに切られており全体の形状をうかがうことができないが、SD4とは接続しないようである。遺物は、中世のかかわり（第16図19）・越前焼の鉢（第16図20）・甕の体部片が出土した。SD4とほぼ直交方向に延びることから、同時期に機能していた区画溝と推定する。

SD6（第11図） A9グリッドで検出した。大部分が調査区外のため規模は不明だが、深さ39cm、幅2.4m以上ある。主軸方向はN-36°-Wである。遺物は、弥生時代後期～古墳時代前期の土器（第15図1～11）が出土した。

SD7（第11図） H9・H10グリッドで検出した。規模は、長さ3.2m、幅35cm、深さ14cmである。主軸方向はN-84°-Eで、SD5とほぼ平行する。東端は上部をカクランに切られており、SD3との切り合いは不明である。底面で柱痕とみられるピットを4基検出した。遺物は、かわらけの細片が出土した。底面のピットの存在から、SD3と同様な性格が想定される。



第11図 SD3～7実測図（平面図縮尺 1/60、断面図縮尺 1/40）

3 井戸

井戸としたものは6基あるが、いずれも調査時点では湧水はみられなかった。水溜りである可能性も考えられるが、底面が地山の砂層付近にまで達していることから、井戸とした。

SE1 (第12図) G8・G9グリッドで検出した。平面形態は円形である。規模は、径160cm、深さ79cmである。曲物を井戸枠としている。曲物は、長径51cm、短径46cm、上部は劣化して原形をとどめていないが、高さ43cm以上ある。下部に1か所、半円形の切れ込みがある。土層堆積は、下層(2・3層)が自然堆積で、上層(1層)が埋め戻しと考えるブロック土である。ブロック土には焼土・炭が含まれる。遺物は、上層からかわらけの細片が、下層から木製品(箸)が出土した。

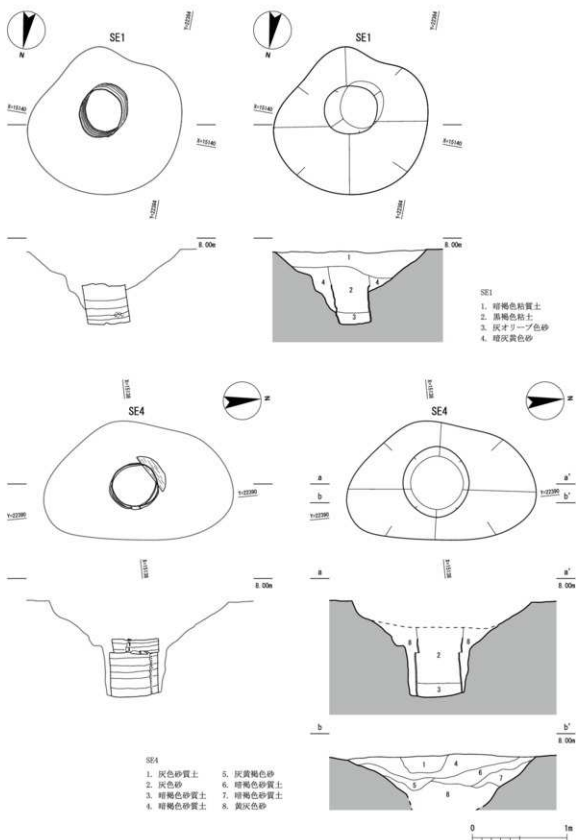
SE2 (第13図) G9グリッドで検出した。平面形態は円形である。規模は、径70cm、深さ123cmである。SE3に切られる。井戸枠の痕跡は確認できず、素掘りと考えられる。土層堆積は、全体が埋め戻しと考えるブロック土である。遺物は、下層から中世のかわらけ(第16図21)、木製品(箸)(第18図26～29)が出土した。第18図29は底面に突き刺さったような状態で出土した。

SE3 (第13図) G9グリッドで検出した。平面形態は不整形円形だが、これは上部が崩落したためと考えられる。規模は、長径101cm、短径68cm、深さ129cmである。SE2を切る。井戸枠の痕跡は確認できず、素掘りとする。土層堆積は、全体が埋め戻しと考えるブロック土であるが、上層(1～3層)は埋め戻しの際に生じた壁面の崩落土との混合とみられる。遺物は、下層から木製品(箸)(第18図30)が出土した。また、検出面上で砥石(第17図25)が出土したが、埋土の状況・出土レベルなどから遺構に伴うものかどうか確定できない。

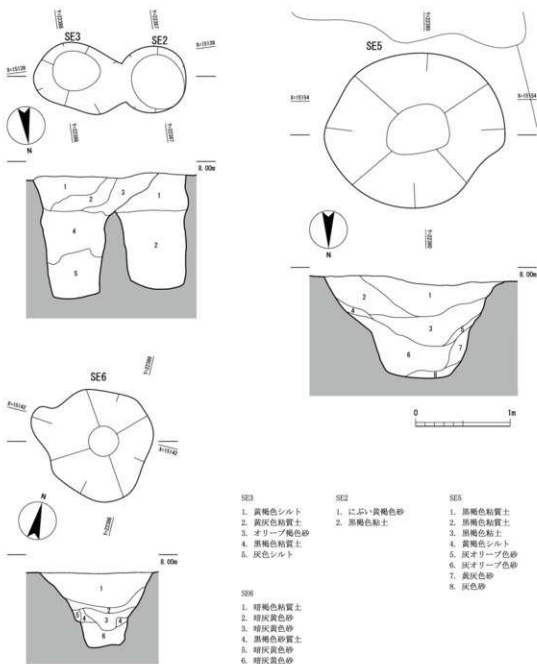
SE4 (第12図) G9・H9グリッドで検出した。平面形態は楕円形である。規模は、長径200cm、短径125cm、深さ103cmである。曲物を井戸枠としている。曲物は2段確認した。1段目と2段目の間に、底板をかませている。下段の曲物は、長径51cm、短径44cm、高さ45cmである。上段の曲物は劣化しており、原形をとどめていなかったが、径46cm、高さ16cm以上ある。遺物は、掘方から中世の越前焼の甕(第16図22)が、井戸枠内からかわらけの細片と木製品(箸・底板・杭?) (第18図31)および種子が出土した。

SE5 (第13図) F7・G7グリッドで検出した。平面形態は円形である。規模は、径190cm、深さ108cmである。井戸枠の痕跡は確認できず、素掘りと考えられる。土層堆積は、下層(6～8層)が自然堆積で、上層(1～5層)が埋め戻しと考えるブロック土である。遺物は、上層から白磁碗(第16図23・24)が出土した。

SE6 (第13図) G8グリッドで検出した。平面形態は円形である。規模は、径120cm、深さ99cmである。井戸枠は確認できなかったが、断面観察から曲物を使用していた可能性がある。出土遺物はない。上層(1層)は埋め戻しと考えるブロック土であり、SE1の上層と類似する。下層(2～6層)は自然堆積である。地山が砂質であったこともあり、掘り込みの有無を判別しづらい状況であったため、調査の終盤に断ち割りをおこなって確認した。



第12图 SE1・4実測図(縮尺 1/40)

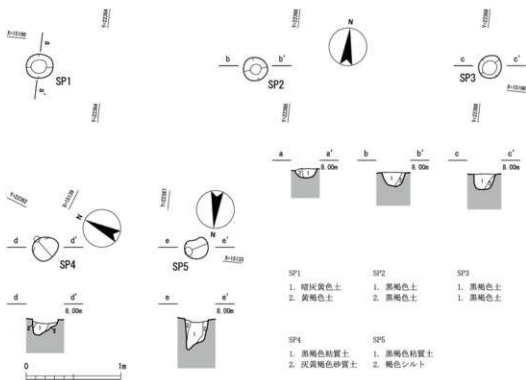


第13図 SE2・3・5・6実測図 (縮尺 1/40)

4 ビット

SP1～3 (第14図) E3グリッドで検出した。平面円形で径20～25cm、深さ10～16cmのビットが、2.3～2.5m間隔で並ぶ。主軸方向はN-84°-Eである。出土遺物はない。対向する位置にビットは確認できなかったが、ビットの間隔や形状・規模などがSB4と類似しており、建物の一部であった可能性がある。

SP4・5 (第14図) G9グリッドで検出した。規模は、SP4が径27cm、深さ17cm、SP5が径24cm、深さ32cmである。いずれも柱穴全体が南～南西側に傾いている。対になるビットは確認できず、性格は不明である。遺物は、SP4からかわかけの細片が出土した。周辺には中世の遺構が集中しており、埋土も類似することから、時期は中世と推測する。



第14図 SP1～5実測図 (縮尺 1/40)

第2節 遺物

1 遺構出土遺物（第15～18図）

SD6（第15図1～11） 1～11は土師器である。⁽¹⁾ 1～8は甕である。1と2は接合しないが、同一個体の可能性がある。6は肩部で、沈線と連続刺突をもつ。9は円形の透孔をもつ高坏の脚部である。10～11は器台である。10は円形浮文を口縁端部と口縁部外面に貼りつける。時期は、10が弥生時代後期であるほかは、おおむね古墳時代前期初頭前後である。

SD3（第16図12～16） かわらけ5点を図示したが、いずれも小片で径・傾きともに誤差を含む。12は大皿で、ナデによって立ち上がりを作り、口縁部がゆるく内湾する。13～16は小皿である。13は口縁部のナデによって、外面に後を残す。時期はいずれも13世紀後半～14世紀前半である。⁽²⁾

SD4（第16図17・18） 17はかわらけである。18は越前焼の鉢で、外面に沈線を2条めぐらす。⁽³⁾

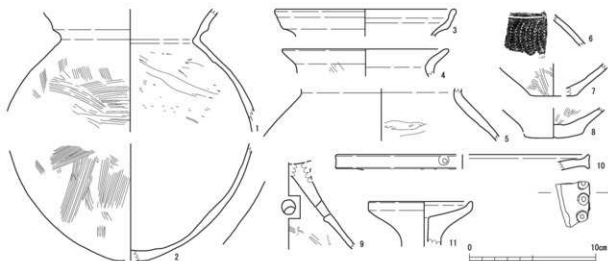
SD5（第16図19・20） 19はかわらけである。20は越前焼の鉢である。時期は13世紀後半である。⁽³⁾

SE2（第16図21、第18図26～29） 21はかわらけである。基本的なつくりは12と共通しており、時期は13世紀後半～14世紀前半である。26～29は箸である。

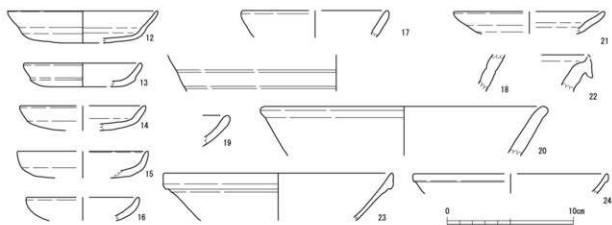
SE3（第17図25、第18図30） 25は凝灰岩製の中砥石である。時期は中世である。30は箸である。

SE4（第16図22、第18図31） 22は掘方出土の越前焼の甕である。口縁部は受け口状で下端が垂下する。時期は13世紀後半である。31は井戸枠内埋土下層出土の曲物底板である。

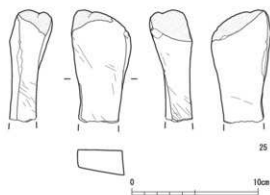
SE5（第16図23・24） 23・24は玉縁口縁をもつ白磁碗である。⁽⁴⁾ 23は大宰府分類Ⅳ類、24は大宰府分類Ⅱ類に相当し、時期は11世紀末～12世紀前半である。



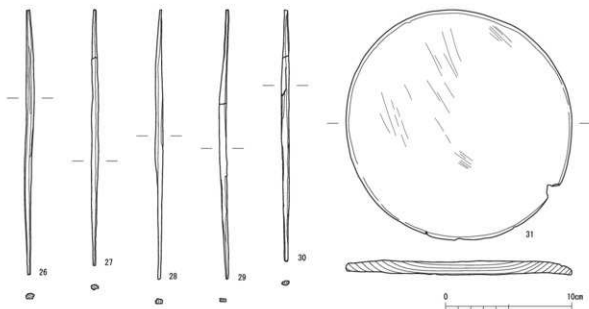
第15図 土器実測図（縮尺 1/3）



第16図 土器実測図（縮尺 1/3）



第17図 石製品実測図（縮尺 1/3）



第18図 木製品実測図（縮尺 1/3）

2 遺構外出土遺物（第19・20図）

32～34は縄文土器である。32は深鉢の口縁部で、内・外面ともに横方向のナデを施す。33は壺の肩部で、外面に横方向の条痕を施す。34は底部で、外面に縦方向の条痕を施す。時期はいずれも縄文時代晩期とみられる。

35～49は土師器である。35～39は甕である。40・41は高坏である。42～45は脚部である。42は円形の透孔をもつ。46～49は壺である。これらの時期は、49が弥生時代後期、41が古墳時代前期後半で、ほかはおおむね古墳時代前期初頭前後である。

50は土鍾である。

51～55は須恵器である。51は坏蓋で、時期は6世紀前半である。52・53は有台坏の底部である。54は碗の高台部であり、時期は9世紀後半～10世紀前半である。55は甕の体部である。須恵器は胎土からいずれも金津産とみられる。

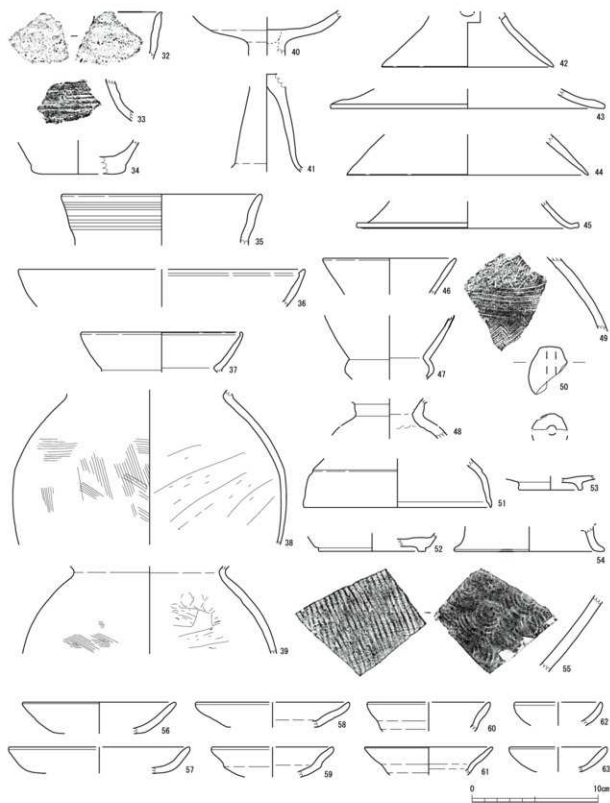
56～63はかわらけである。いずれも小破片で、径・傾きは多分に誤差を含む。基本的なつくりは遺構出土のものと共通するものが多い。おおむね13～14世紀と考えるが、56・57はやや新しく、15世紀以降と推測する。

64～71は越前焼である。64～66は甕である。64は口縁部が受け口状で下端が垂下する。65は口縁部が受け口状だが下端は垂下しておらず、64よりも時期的に後出する。67は壺である。68～71は鉢である。68のみ描目が確認できる。69～71の時期は13～14世紀であるが、68は15世紀後半まで下る。

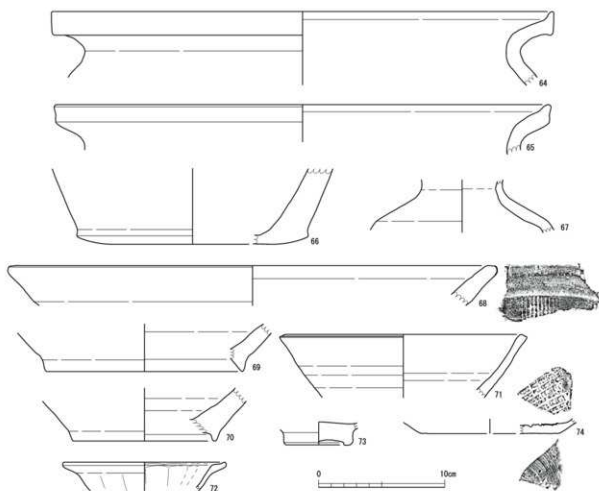
72・73は青磁である。72は坏、73は削り出し高台の底部である。74は瀬戸焼の卸皿である。青磁と瀬戸焼の時期は、14～15世紀である。

註

- 1 土師器は古墳時代以降の土器に対する名称だが、本報告では便宜的に弥生時代後期の土器を含め土師器として一括しておく。
- 2 かわらけの年代については、以下の文献を参考にした。
阿部来 2007「福井県における10から14世紀の土器皿と陶磁器」『中世前期北陸のカワラケと輸入陶磁器・施釉陶器・瀬戸美濃製品』北陸中世考古学研究会
- 3 越前焼の年代については、以下の文献を参考にした。
木村孝一郎 2016『越前焼総合調査事業報告』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 4 陶磁器の分類と年代については、以下の文献を参考にした。
山本信夫 2000『大宰府条坊跡XV』太宰府市教育委員会



第19図 土器・土製品実測図 (縮尺 1/3)



第20図 土器実測図（縮尺 1/3）

第2表 土器観察表1

番号	出土地点 層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	焼成	色調
1	S06	土師器	甕				外：口縁ヨコナデ、体部ハケ 内：口縁ヨコナデ、体部ケズリ	普通	にぶい黄褐色
2	S06	土師器	甕				外：ハケ 内：ケズリナデ	普通	外：にぶい褐色 内：灰褐色
3	S06	土師器	甕	14.0			ヨコナデ	良	外：褐色 内：浅黄褐色
4	S06	土師器	甕	12.8			外：ヨコナデ、ハケ 内：ヨコナデ	普通	にぶい褐色
5	S06	土師器	甕				外：ハケ 内：ケズリ	普通	褐色
6	S06	土師器	甕				外：沈線、刺突 内：ケズリナデ	普通	灰白色
7	S06	土師器	甕		3.8		外：ハケ 内：ハケ、ケズリ	普通	外：にぶい褐色 内：褐色
8	S06	土師器	甕		4.8		内：ハケ	普通	外：灰褐色 内：にぶい褐色
9	S06	土師器	高坏				外：ヘラミガキ 内：ハケ	良	外：灰白色 内：にぶい褐色
10	S06	土師器	器台				ヘラミガキ、円形浮文	良	外：にぶい褐色 内：褐色
11	S06	土師器	器台	7.5			内：ヘラミガキ	普通	浅黄褐色
12	S03	中世土師器	皿	11.8		(2.6)	内：ナデ	普通	浅黄褐色
13	S03	中世土師器	皿	9.2		(1.9)		普通	にぶい黄褐色
14	S03	中世土師器	皿	(9.8)				不良	にぶい黄褐色
15	S03	中世土師器	皿	(10.2)			ナデ	普通	にぶい黄褐色
16	S03	中世土師器	皿	(8.8)				普通	外：浅黄褐色 内：にぶい褐色
17	S04	中世土師器	皿	(11.4)				普通	外：赤褐色 内：灰褐色
18	S04	越前焼	鉢				外：クロコナデ、沈線 内：クロコナデ	良	外：赤褐色 内：灰褐色
19	S05	中世土師器	皿					普通	にぶい黄褐色
20	S05	越前焼	鉢	22.4			クロコナデ	良	外：赤褐色 内：にぶい黄褐色
21	S02	中世土師器	皿	11.8				普通	外：にぶい黄褐色 内：灰褐色
22	S04 榎方	越前焼	甕				クロコナデ	良	外：灰褐色 内：灰オリーブ色
23	S05 1層	白磁	碗	18.0				良	灰白色
24	S05 1層	白磁	碗	(15.2)				良	灰白色
32	S04	縄文土器	深鉢				外：ナデ	普通	外：にぶい黄褐色 内：浅黄褐色
33	C5 旧水路	縄文土器	釜?				外：条痕	普通	外：灰白色 内：にぶい黄褐色
34	D5 S01底面	縄文土器			7.4		外：条痕	普通	外：浅黄褐色 内：浅黄褐色
35	D7 表土	土師器	甕	15.8			外：胴部線 内：ヨコナデ	普通	外：灰白色 内：灰褐色
36	C8 S02	土師器	甕	(22.6)			ヨコナデ	普通	外：灰白色 内：にぶい黄褐色
37	C8 S02	土師器	甕	12.6			ヨコナデ	良	にぶい褐色
38	B8 カクラン	土師器	甕				外：ハケ 内：ケズリ	普通	浅黄褐色
39	D6 表土	土師器	甕				外：ヨコナデ、ハケ 内：ヨコナデ、ケズリ	良	外：にぶい褐色 内：明褐色
40	A8 S02	土師器	高坏					普通	にぶい褐色
41	C3 表土	土師器	高坏				外：ヨコナデ 内：坪底ハケ	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい褐色
42	B8 S01上層	土師器			13.5			不良	褐色
43	A9 表土	土師器			21.6			良	外：灰白色 内：にぶい褐色
44	C8 S02	土師器			19.0		外：ヨコナデ	良	にぶい褐色
45	B7 表土	土師器	壺		17.5			普通	にぶい褐色
46	C8 S02	土師器	壺	10.4			ミガキ	普通	にぶい褐色
47	B8 表土	土師器	壺					良	外：にぶい褐色 内：褐色
48	G6 カクラン	土師器	壺					普通	浅黄褐色
49	B8 カクラン	土師器	壺				外：縞線	普通	灰白色
50	D8 S02	土製品	土師					普通	にぶい黄褐色

第3表 土器観察表2

番号	出土地点 層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	焼成	色調
51	F6 表土	須恵器	坏蓋	14.8			クロコナデ	普通	外：灰 内：灰白色
52	G5 カクラン	須恵器	有台坏		8.4		クロコナデ	良	灰色
53	F3 表土	須恵器	有台坏		4.9		クロコナデ	良	灰色
54	E7 排水溝	須恵器	杓		11.8		クロコナデ	良	灰色
55	G3 表土	須恵器	甕					良	灰色
56	G4 カクラン	中世土師器	皿	12.0		(2.5)	ナデ	普通	褐色
57	J8 表土	中世土師器	皿	(14.2)		(2.1)	ナデ	普通	にぶい褐色
58	I8 カクラン	中世土師器	皿	(12.0)		(2.0)	ナデ	不良	浅黄褐色
59	H7 カクラン	中世土師器	皿	(10.5)			ナデ	不良	浅黄褐色
60	I8 カクラン	中世土師器	皿	(9.5)			ナデ	普通	にぶい黄褐色
61	I9 カクラン	中世土師器	皿	10.0				不良	浅黄褐色
62	H7 表土	中世土師器	皿	(6.7)			ナデ	普通	灰白色
63	J10 カクラン	中世土師器	皿	(7.5)		(2.0)	ナデ	普通	にぶい褐色
64	G7 表土	越前焼	甕	39.5			クロコナデ	良	外：灰褐色 内：にぶい黄褐色
65	H10 カクラン	越前焼	甕	38.8			クロコナデ	良	外：灰褐色 内：灰黄色
66	H9 カクラン	越前焼	甕		18.3		クロコナデ	良	外：灰褐色 内：灰黄色褐色
67	C2 表土	越前焼	甕				クロコナデ	良	外：褐色 内：にぶい褐色
68	G7 カクラン	越前焼	楕鉢	38.3			クロコナデ	普通	にぶい褐色
69	H9 カクラン	越前焼	鉢		15.5		クロコナデ	良	灰白色
70	C8 表土	越前焼	鉢		11.2		クロコナデ	良	外：褐色 内：灰黄色
71	H9 表土	越前焼	鉢	18.7			クロコナデ	良	外：灰褐色 内：にぶい赤褐色
72	I6 表土	青磁	坏	12.6				良	緑・黄緑色
73	2IX 表土	青磁			5.0		高台削り出し	良	緑・黄緑灰色 高台内：灰褐色
74	D7 表土	瀬戸焼	卸皿		(11.0)		底部回転糸切り	良	灰白色

第4表 石製品観察表

番号	出土地点 層位	種別	器種	法量	石材	色調
25	SE3	石製品	砥石	長：9.0cm 幅4.7cm 厚：3.4cm	凝灰岩	灰白色

第5表 木製品観察表

番号	出土地点 層位	種別	器種	法量	分析
26	SE2下層	木製品	箸	長：21.0cm 幅：0.65cm 厚：0.4cm	No. 4
27	SE2下層	木製品	箸	長：20.3cm 幅：0.55cm 厚：0.4cm	No. 5
28	SE2下層	木製品	箸	長：21.4cm 幅：0.6cm 厚：0.4cm	No. 6
29	SE2底面	木製品	箸	長：21.35cm 幅：0.5cm 厚：0.25cm	No. 7
30	SE3	木製品	箸	長：19.95cm 幅：0.6cm 厚：0.35cm	No. 8
31	SE4	木製品	底板	幅：18.25×17.9cm 厚：1.1cm	No. 3
	SE4井戸枠	木製品	曲物	径：51×44cm 高：44.6cm 厚：0.9cm	No. 1
	SE4構築材	木製品	底板	長：44.4cm 幅：12.7cm 厚：1.1cm	No. 2

第5章 自然科学分析

第1節 樹種同定

1. 試料

試料は北横地中才遺跡から出土した木製品8点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。なお、No. 5, 7は遺物の形状から木口の切片が採取出来なかった。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹3種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

第6表 木製品樹種同定結果

No.	品名	樹種	木取
1	曲物	スギ科スギ属スギ	板目
2	板材	スギ科スギ属スギ	柾目
3	底板	ヒノキ科ヒノキ属	板目
4	箸	スギ科スギ属スギ	板目
5	箸	スギ科スギ属スギ	柾目
6	箸	スギ科スギ属スギ	柾目
7	箸	ヒノキ科アスナロ属	柾目
8	箸	ヒノキ科ヒノキ属	板目

1) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don) (No. 1, 2, 4, 5, 6)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

2) ヒノキ科ヒノキ属 (*Chamaecyparis* sp.) (No. 3, 8)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州（福島以南）、四国、九州に分布する。

3) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujopsis* sp.) (No. 7)

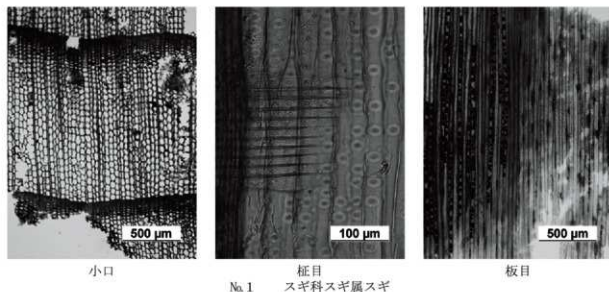
木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からヤスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

参考文献

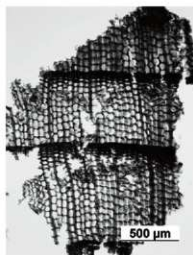
- 林 昭三『日本産木材顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所 (1991)
 伊東隆夫『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ』京都大学木質科学研究所 (1999)
 島地 謙・伊東隆夫『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣出版 (1988)
 北村四郎・村田 源『原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ』保育社 (1979)
 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)
 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

使用顕微鏡

Nikon DS-F11



第21図 顕微鏡写真1



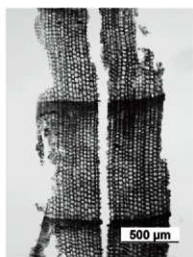
小口



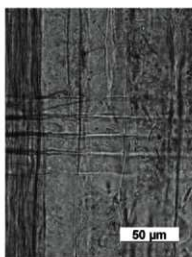
柁目
No. 2 スギ科スギ属スギ



板目



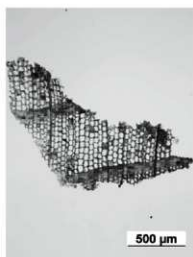
小口



柁目
No. 3 ヒノキ科ヒノキ属



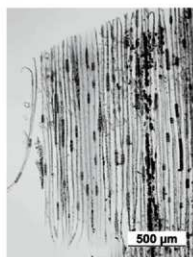
板目



小口



柁目
No. 4 スギ科スギ属スギ

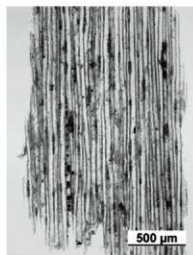


板目

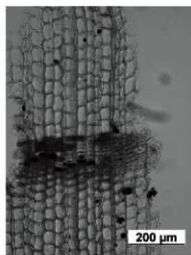
第22図 顕微鏡写真2



No. 5 柁目
スギ科スギ属スギ



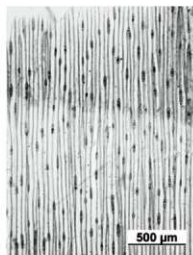
板目



小口



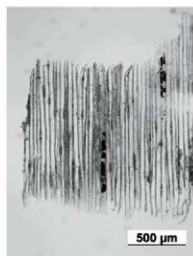
No. 6 柁目
スギ科スギ属スギ



板目

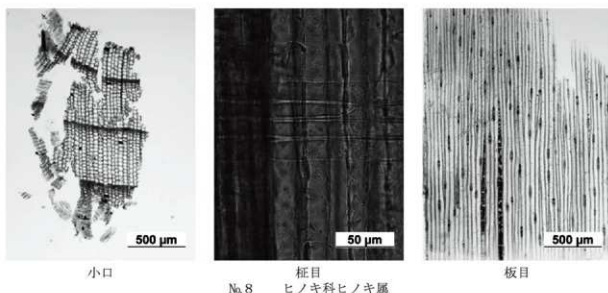


No. 7 柁目
ヒノキ科アスナロ属



板目

第23図 顕微鏡写真3



第24図 顕微鏡写真4

第2節 年代測定

1. はじめに

北横地中才遺跡より検出された試料2点について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定をおこなった。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第7表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（コンパクト AMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹³C濃度について同位体分別効果の補正をおこなった後、¹³C年代、暦年代を算出した。

第7表 測定試料および処理

No.	試料データ	前処理
1	種類：木材（曲物） 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L、水酸化ナトリウム：1.0mol/L、塩酸：1.2mol/L）
4	種類：木材（箸） 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L、水酸化ナトリウム：1.0mol/L、塩酸：1.2mol/L）

3. 結果

第8表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正をおこなった暦年校正に用いた年代値と校正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹³C年代を示す。暦年校正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年校正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年校正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年校正の詳細は以下のとおりである。

暦年校正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を校正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年校正にはOxCal4.2 (校正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。

第8表 年代測定および暦年校正の結果

No.	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
1	-23.35 ± 0.28	1155 ± 22	1155 ± 20	778-790 cal AD (8.4%)	
				827-841 cal AD (6.6%)	776-906 cal AD (65.6%)
				864-900 cal AD (30.0%)	916-968 cal AD (29.8%)
				921-950 cal AD (23.1%)	
4	-22.85 ± 0.17	1111 ± 19	1110 ± 20	898-925 cal AD (33.8%)	891-983 cal AD (95.4%)
				945-971 cal AD (34.4%)	

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafflidason, H., Hajdas, L., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughes, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

第6章 まとめ

第1節 中世の遺構の時期と集落の変遷

今回の調査で検出した遺構の時期は、弥生時代後期～古墳時代前期の溝1条と時期不明の掘立柱建物2棟を除き、中世と考える。一部の遺構では遺物が出土したが、ほとんどが小破片で数も少ないため、遺物のみでは詳細な時期を特定できない。そのため、遺物以外の要素も含めて、遺構の時期を検討する。

井戸については、SE5を除いて狭い範囲に密集しており、水が湧かなくなったものを順次掘りおした結果とみる。SE2・4および、これらの井戸と同時期に使用されたと考える南側の溝(SD3～5・7)からは、13世紀後半～14世紀前半の遺物が出土した。5基の井戸がこの間に連続して築かれたとすると、底面標高の高いものから低いものへ、(旧)SE6→SE1→SE4→SE2→SE3(新)という序列が想定される。構造についてみていくと、SE1・4・6は曲物が使われた、もしくはその可能性があり、SE2・3は素掘りである。越前地域における鎌倉時代の井戸は曲物を使用しているが、南北朝期から室町時代には素掘りへと変化するという傾向が指摘されており、前述の想定とも整合する。SE5については、出土遺物から11世紀末～12世紀前半と考える。溝については、主軸方向がほぼ正方位のもの(SD3)と、やや西に振れるもの(SD4・5・7)があり、切り合い関係から、やや西に振れるものが新しいと判断する。

これらのうち、SE1・6の上層埋土とSD3の埋土は比較的類似することから、近接した時期を想定する。また、SD3は建て替え・修理の痕跡がみられ、比較的長期間の使用が想定される点や、建物区画と井戸構造の変化という点を重視し、1段階:SE5、2段階:SE1・6、SD3(古)、3段階:SE4、SD3(新)、4段階:SE2・3、SD4・5・7という4期に区分する。それぞれ、11世紀末～12世紀前半、13世紀後半、13世紀末～14世紀初頭、14世紀前半という年代を想定しておきたい。なお、SE2出土の箸とSE4の井戸枠(曲物)については放射性炭素同位体による年代測定をおこなったところ古代という結果が出ており、考古学的な推定年代とは大きくかけ離れている。SE4については井戸掘方から13世紀の越前焼が出土しており、遺構自体が古代まで遡ることはまずあり得ない。製品自体が古い木材を使って作られた、製作・使用から転用・埋没までに相当の期間を要したという可能性もあるが、別々の遺物が同じような年代値を示している点に疑問が残る。木製品の年代測定に関しては、(2) 共存する土器から推定される年代よりも古くなる場合が多いという指摘もあり、今後検証すべき問題と考える。

掘立柱建物については遺物が出土していないため、柱間寸法に着目して検討する。坂井市坂井兵庫地区遺跡群上兵庫子地区 SB-01・02、福井市寄安遺跡 SH2001・2002、越前市村田遺跡 2A 区 SB2002は、いずれも柱間寸法が2.5～2.6m前後の総柱建物で、柱穴内や周囲から出土した遺物から時期は11～12世紀と考える。大野市下丁遺跡の掘立柱建物は、柱間寸法が2.3～2.4m前後のものが多く、時期は13世紀前半が中心である。永平寺町諏訪問興行寺遺跡の掘立柱建物の柱間寸法は、側柱建物ではかなりばらつきがあるが、13世紀後半の総柱建物についてみていくと、2.2～2.3m前後となるものが多い。15世紀以降については越前間(6尺2寸)の規格が一部の建物で採用されたという指摘(8)があり、おおむね時期が下るにしたがって、柱間寸法が短くなる傾向を指摘できる。

SB1については柱間寸法が一定ではないが、2.2mを基準として設計されたとみることができ、14世

紀前半頃、4段階前後に位置付ける。SB4については、柱間寸法が2.4～2.5mであり、11～12世紀と考える。SE5がSB4に伴う井戸であると想定し、1段階に位置付ける。また、SP1～3についてもSB4と同規模の柱間寸法をもつとみることができ、同時期の建物の一部である可能性がある。

以上の検討を基に、北横地中才遺跡における中世集落の変遷についてまとめる。

11世紀末～12世紀前半 掘立柱建物1棟(SB4)と、井戸1基(SE5)を検出した。SP1～3も同時期の建物の一部である可能性があり、主軸方向がややずれることから2棟の建物で時期差が存在する可能性もある。ただ、いずれにしてもこの時期の集落に典型的な、散村的な集落景観を想定することができる。井戸は1基しか確認できず、遺構外遺物でも12世紀の遺物は少ないことから、集落が長期間継続的に営まれたとは考えにくい。集落が営まれたのは比較的短時間で、12世紀後半～13世紀前半には居住空間として利用されることはなかったと考える。

13世紀後半～14世紀前半 区画溝や堀もしくは柵と推測される溝4条(SD3～5・7)、井戸5基(SE1～4・6)を検出した。掘立柱建物(SB1)とピット(SP4・5)も同時期の可能性がある。南側の遺構群に伴う建物は検出していないが溝の一部がカクランに切られており、調査区南側に集落の中心が存在したことはあきらかである。集落構造・規模については不明な部分が多いが、前段階と異なり区画のための施設を伴っている点には留意される。また、ある程度の期間継続して集落が営まれたと考える。遺構外出土遺物は15世紀以降のものもあり、場所を移動しながら14世紀後半以降も集落が営まれた可能性もある。北側の建物(SB1)については、南側の遺構群と離れて単独で存在することや構造・規模から考えると、住居ではなく何らかの小屋のようなものであったと想定しておきたい。

第2節 坂井平野における古代から中世前期の遺跡について

坂井平野における古代・中世の遺跡の盛衰は、この地に存在した荘園とも関連していると考えられる。そこで、はじめに坂井平野における荘園開発の流れを概観し、その上で遺跡の消長を示し、その中での北横地中才遺跡の位置付けを検討する。また、近年進展している過去の気候変動研究の成果との関係についてもふれる。

坂井平野の荘園 越前国には8世紀中頃、東大寺領荘園をはじめとする数多くの荘園が置かれたことが知られている。坂井平野では、天平勝宝元年(749)に田宮荘・子見荘の占定がおこなわれ、天平勝宝6年(754)頃から田地の買得・施入により桑原荘・鯖田国富荘が成立した。越前国に多くの荘園が置かれた背景としては、越前国の特に足羽・坂井郡が比較的未開の地が多く、当時開発が盛んにおこなわれていたためと考えられている。⁽¹⁰⁾ 実際これら荘園では、開墾のために大規模な溝の開削がおこなわれており、開発の余地があったことがうかがえる。天平宝字元年(757)の越前国使等解には、桑原荘での溝の開削・修理に関する記録が、天平神護2年(766)の越前国坂井郡溝江庄所使解案および越前国坂井郡子見庄所使解案には、溝江荘・子見荘における溝の開削に関する記録がある。9世紀の荘園経営の実態を示す資料は少ないが、10世紀には多くの荘園が衰退したことが知られる。天曆5年(951)の越前国足羽郡序牒には、「道守・鑑庄田、雖在條里、本自成荒野或原澤、更無口寄作人、養置庄田、曾所不聞也」とあり、足羽郡の荘園は10世紀中頃には衰退していた。また、長徳4年(998)の東大寺領諸国庄家田地目録案には、足羽郡・坂井郡の荘園の面積が示されているが、「右、件郡々田荒廢數多、熟田不幾」とあり、遅くとも10世紀末の段階で坂井郡でも多くの荘園が衰退していた。このような北陸における初期荘園の衰退については、律令制の地方支配の弱体化や労働力編成の不安定

⁽¹³⁾ 性といった要因によるものとされる。

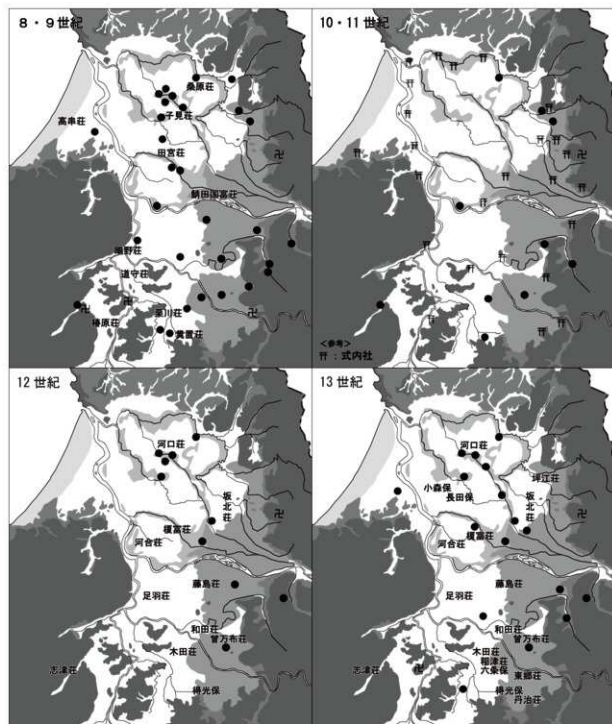
11世紀末～12世紀初頭には、坂井平野の北部に興福寺領河口荘が成立する。河口荘は康和年中(1099～1104)に白河法皇が一切経料所として春日大社に寄進したことにより成立したとされる。この荘園の灌漑のために整備されたと思われるのが十郷用水であり、おそらく初期荘園の開発に伴い開削された用水路なども利用して整備されたと考えられている。⁽¹⁴⁾ その後は、12世紀後半に多くの荘園が成立する。河合荘は嘉応3年(1171)、榎富荘は寿永3年(1184)の成立であり、坂北荘の史料上の初出は建久2年(1191)である。

鎌倉幕府成立以降は次第に荘園の新設は少なくなるようだが、坪江荘は正応元年(1288)に後深草上皇が春日大社へ寄進して成立したものである。坪江荘と河口荘はいずれも興福寺(春日大社)の荘園であり、これらを併せて「北国荘園」とも呼ばれた。

坂井平野における遺跡の消長と荘園・気候変動 8～9世紀の遺跡は多く、坂井平野全域に分布する。上蔵垣内遺跡で検出した古代の溝については、子見荘へ引かれた用水路の一部である可能性も指摘されており、この時期に全域で大規模な開発が進んだことがうかがわれる。⁽¹⁵⁾

10～11世紀の遺跡数は急激に減少している。坂井平野で10世紀の遺物がみられるのは、中角遺跡、南稲越遺跡、乗兼・坪江遺跡、女形谷長畝遺跡が挙げられるのみで、遺構は南稲越遺跡で井戸を検出している程度である。11世紀の遺跡は明確ではなく、大関西遺跡と南稲越遺跡で若干の遺物が出土しているにすぎない。サンプルが少なくやや不確実だが、遺跡の立地は山沿いや大きな河川の周辺に多く、坂井平野の中央部には少ないようである。ここで、10世紀前半の状況を間接的に示すものとして式内社の分布をみていくと、遺跡の分布とほぼ同様の傾向を指摘できる。これらのことから、坂井平野の中央部にある集落はこの時期、相対的に衰退していたと考えられる。過去の気候研究の成果からは、10～11世紀が乾燥(少雨)・温暖な時期であったとされ、特に930～950年代には少雨と高温の年が続き、それに応えるかたちで支配体制の改編がおこなわれたとされる。⁽¹⁶⁾ ⁽¹⁷⁾ そもそも坂井平野に初期荘園が多く置かれたのは、もともとは耕作に適した土地条件ではなく、開発が進んでいなかったことが背景に存在した。特に平野の中央部では安定して水を得るために大規模な用水路の整備が不可欠であり、10世紀の少雨傾向はこれらの地域における生産活動に大きな影響を与え、初期荘園の多くが衰退したと考えられる。坂井平野における遺跡数の減少は、このことを端的に物語る。

12世紀になると遺跡数は若干増加し、前段階で遺跡が確認できなかった坂井平野の中央部にも新たな遺跡が出現する。大味中遺跡、大関東遺跡、大関西遺跡、坂井兵庫地区遺跡群、南稲越遺跡では、中国製の白磁碗や京都系の2段ナデを施すかわらけなどが出土している。これらの遺跡は、この時期に成立した河口荘の範囲内にあり、なんらかの関連が想定される。また、白磁や京都系かわらけの出土は、これらの集落の成立に際して京都など外部からの影響力が及んだことを示唆しているとも考えられる。北横地中才遺跡もこの時期に成立するが、ここでも白磁が出土している点が注目される。12世紀初頭前後の新たな集落の成立には、11世紀後半が気候の変動幅が比較的少ない平穏期であったことが関係している可能性がある。河口荘が寄進されたのは康和年中(1099～1104)とされるが、そうであるならば、それ以前の段階で坂井平野の再開発が始まっていたとみるべきだろう。周辺地域に目を向けると、志津荘・木田荘もほぼ同時期に成立したとみられる。おそらく11世紀後半に福井平野全域で再開発が進み、そのことが中世荘園の成立や12世紀前半の遺跡数の増加につながったと考えられる。



第25図 福井平野における8～13世紀の遺跡・荘園分布図

しかし、坂井平野では多くの遺跡で12世紀後半の遺構・遺物は明確ではなく、12世紀から13世紀にかけて継続する集落は少ない。11世紀後半に比較的平穏であった気候は、12～16世紀には数十年周期での変動を繰り返しながらも一貫して気温の低下・降水量の増加傾向が続く。12世紀前半には冷夏が連続し、飢饉が多発している。12世紀に長期間継続する集落がみられないのは、急激な気候変動に対応できず、大規模な集落を形成することがなかったためと考えられる。ただし、遺跡の立地は12世紀から13世紀にかけて大きな変化はみられず、坂井平野では一貫して平野中央部への進出を続けている。

第9表 坂井平野における遺跡の消長表

遺跡名	8世紀	9世紀	10世紀	11世紀	12世紀	13世紀
大味上遺跡						
大味中遺跡						
大間東遺跡						
大間西遺跡						
上蔵垣内遺跡						
坂井兵庫地区遺跡群						
西長田遺跡						
若宮遺跡						
東太郎丸遺跡						
江留下・境元町遺跡						
石盛遺跡						
北横地中才遺跡						
高柳・下安田遺跡						
客安・栗森遺跡						
中角遺跡						
南稲越遺跡						
東田中遺跡						
栗兼・坪江遺跡						
女形谷長崎遺跡						
坂寄三宅田遺跡						
菅谷島帽子遺跡						
福井城跡						
高柳遺跡						
林・藤島遺跡						
河増遺跡						
吉野塚遺跡						
曾万布遺跡						
和田防町遺跡						
大畑遺跡						
猪谷田畑遺跡						
藤谷砂田遺跡						
上吉野法善田遺跡						
下八条遺跡						
小稲津遺跡						
大森鎌島遺跡						
上筋生田遺跡						
今市遺跡						
大土呂遺跡						
義置遺跡						

集落を転々としながら存続していた可能性が考えられる。

13世紀になるとさらに遺跡数は増加し、遺構・遺物の検出数も多くなる。集落形態の変化などの要因による部分もあるが、12世紀と比べ継続的に営まれた集落が増加した結果と考える。十郷用水などの用水路網の再整備により、気候変動に大きく左右されず安定した生産活動をおこなうことができるようになったことも一因と考えられる。また、上蔵垣内遺跡、坂井兵庫地区遺跡群、若宮遺跡、東太郎丸遺跡では多数の井戸が集中して検出されている。これらに伴う集落域は明確ではないものもあり、灌漑用の井戸という指摘もある。出土遺物の時期は13～16世紀を主体とするが、特に15・16世紀のものが多い。12～16世紀の降水量は数十年周期での大きな変動を繰り返しており、少雨が続いた時期には用水路の水が枯渇することもあったと考えられる。また、開発が進み耕作面積がさらに増加するなかで、水不足はさらに深刻化していったのだろう。そのような状況への対応としてこれらの井戸が掘削された可能性がある。

まとめ 北横地中才遺跡の西側には現在、十郷用水が流れている。現在の十郷用水がどの程度中世の段階の形を伝えているのかは不明だが、大きく場所を移動させているとは考えにくく、当時から付近を流れていたものと想定している。北横地中才遺跡において集落が出現するのは、まさに河口荘の成立に伴い十郷用水が整備されたとされる時期であり、あるいはその整備に伴って営まれた集落のひ

とつかかもしれない。また、集落が継続して営まれるようになるのは13世紀後半であり、おそらく用水路網の整備・耕地の再開発が進んだ結果、13世紀以降、坂井平野において継続的な集落が出現することとも対応する現象としてとらえられる。北陸地中才遺跡は中世前期の坂井平野の盛衰と共にしてきた遺跡であったといえる。

本稿では時間的な制約から、坂井平野の遺跡の消長と荘園・気候変動との関連についておおまかな見通しを示すにとどまった。個別の遺跡・遺構の性格についてはほとんど言及できず、遺物の時期比定などにも問題を残している。また、集落構造とその変化、それらの社会的背景など、検討できなかった事項はあまりに多い。今後、この報告書を含めた遺跡の発掘調査成果が広く「活用」されることに期待したい。

註

- 1 岩田隆 2001「越前・若狭の中世井戸」『中世北陸の井戸』北陸中世考古学研究会
- 2 鬼頭剛・赤塚次郎 2005「AMS年代と考古編年」『研究紀要』(6) 愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
- 3 中川佳三・山本孝一 2004『坂井兵庫地区遺跡群Ⅰ(遺構編)』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
中川佳三・山本孝一・田中勝之・森由佳 2005『坂井兵庫地区遺跡群Ⅱ(遺物編)』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 4 福井市文化財保護センター(編) 2012『寄安遺跡発掘調査報告書Ⅰ』福井市教育委員会
- 5 林憲司 1990『村国遺跡』福井県武生市教育委員会
- 6 青木隆佳・堀大介・野澤雅人・中川あや 2004『下丁遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
下丁遺跡では古代の掘立柱建物も検出しているため、集計は柱穴から中世のかわらけが出たもののみを対象とした。
- 7 富山正明・清水孝之 2008『諏訪興行寺遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
田中勝之・富山正明・月輪泰・赤澤徳明・本多達也・木村孝一郎 2012『諏訪興行寺遺跡Ⅱ』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 8 清水孝之 2001「第5章 第1節 遺構について」『小倉石町遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 9 同様の検討はすでに岩田隆がおこなっているが、近年の調査事例も加えて再構成した。
- 10 岩田隆 2012「越前における中世前期の開発」『北陸における中世前期の開発』北陸中世考古学研究会
- 11 松浦義明 1993「越前国」『講座日本荘園史6 北陸地方の荘園・近畿地方の荘園Ⅰ』吉川弘文館
- 12 小口雅史 1997「第2章 第3節 坂井平野の古代東大寺領荘園」『福井市史 通史編1 古代・中世』福井市
- 13 溝江荘は、天平宝字2年(758)を最後に史料上からみられなくなる桑原荘と同一のものである可能性も指摘されているが、確証は得られていない。
- 14 註11 文献
棚木謙周 1993「第5章 第1節 初期荘園の成立と経営」『福井県史 通史編1 原始・古代』福井県
- 15 清田善樹 1993「阿口・坪江荘」『講座日本荘園史6 北陸地方の荘園・近畿地方の荘園Ⅰ』吉川弘文館
みくに龍翔館(編) 2014『十部用水ものがたり 〜その伝説と歴史〜』みくに龍翔館
- 16 青木隆佳 2013「第5章 まとめ」『大関東遺跡・上蔵垣内遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 17 中塚武 2020「第1章 中世における気候変動の概観」『気候変動から読みなおす日本史4 気候変動と中世社会』臨川書店
- 18 田村憲美 2020「第7章 10〜12世紀の気候変動と中世荘園の形成」『気候変動から読みなおす日本史4 気候変動と中世社会』臨川書店
- 19 宇佐美雅樹 1994「第3章 第5節 4 農業の安定化と用水」『福井県史 通史編2 中世』福井県

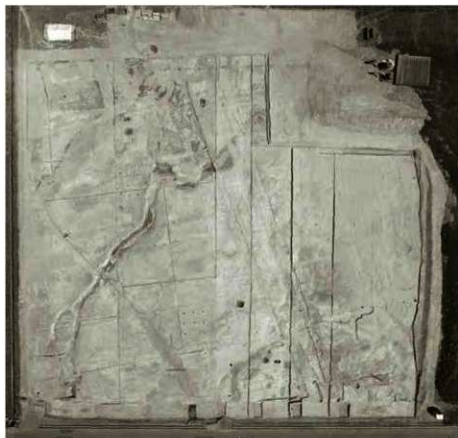
写 真 图 版



(1) 遺跡遠景 (南から)



(2) 遺跡遠景 (北から)



(1) 調査区全景 (上が北)



(2) 調査区南部近景



(1) SB 1 完掘状況 (南から)



(2) SB 4 完掘状況 (南から)



(1) SD 3 完掘状況 (東から)



(2) SD 3 柱痕近景 (東から)



(3) SD 4 完掘状況 (南から)



(4) SD 5 完掘状況 (東から)



(1) SD6 完掘状況 (西から)



(2) SE1 曲物検出状況 (北から)



(3) SE1 曲物下部 (北から)



(4) SE2 断面 (北から)



(5) SE2 遺物出土状況 (西から)



(6) SE3 断面 (北から)



(7) SE2・3 完掘状況 (北西から)



(8) SE4 曲物検出状況 (東から)



(1) SE 4 底板検出状況 (南東から)



(2) SE 5 断面 (北から)



(3) SE 5 完掘状況 (北東から)



(4) SE 6 断面 (南から)



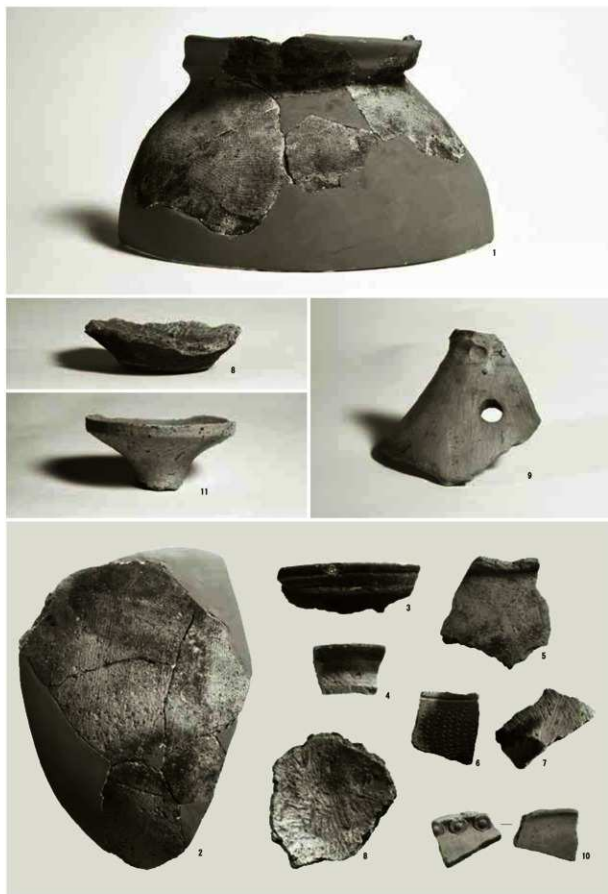
(5) SP 1～3 完掘状況 (東から)



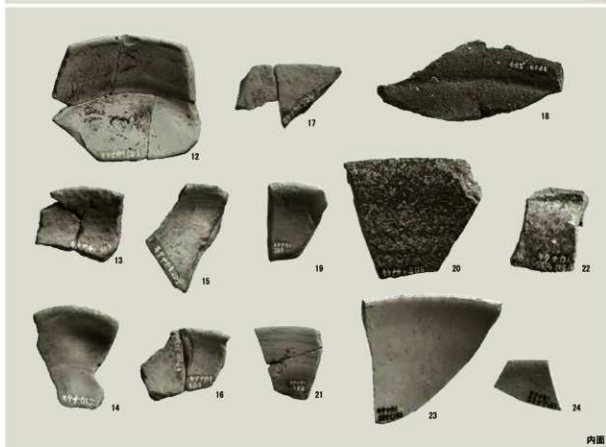
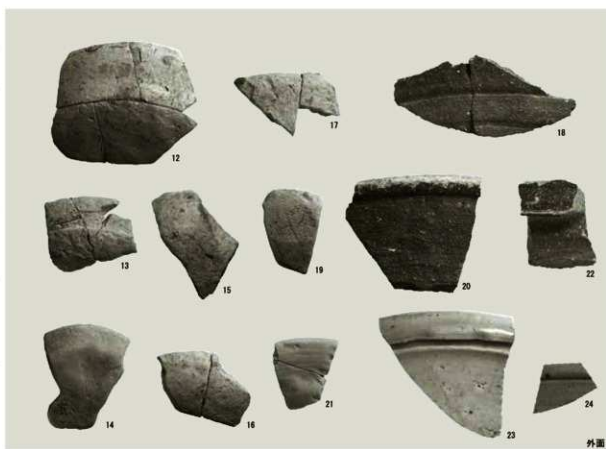
(6) SP 4 完掘状況 (南から)



(7) SP 5 完掘状況 (南西から)



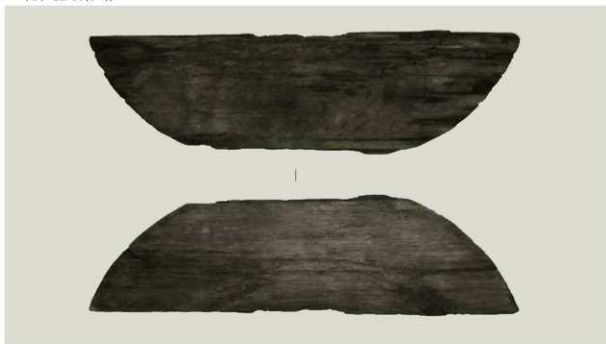
(1) SD6 出土遺物



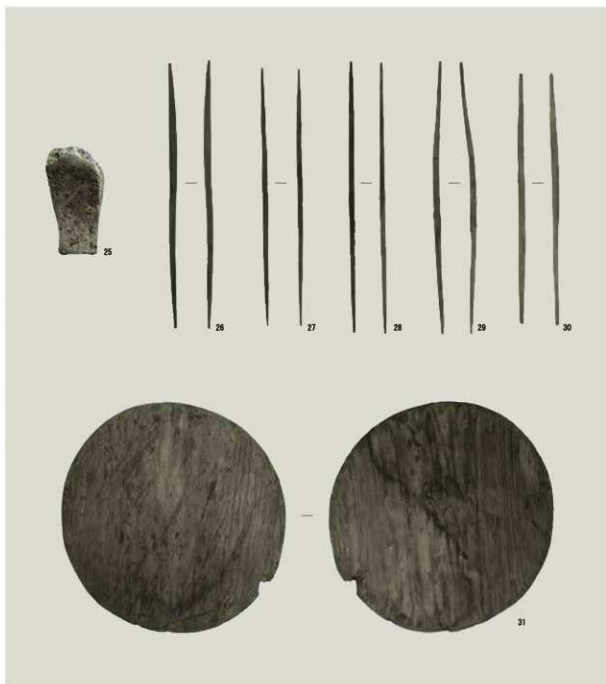
(1) SD3~5, SE2・4・5出土遺物



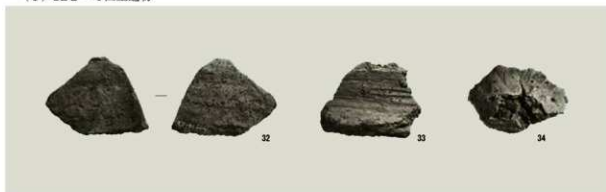
(1) SE 4 井戸枠



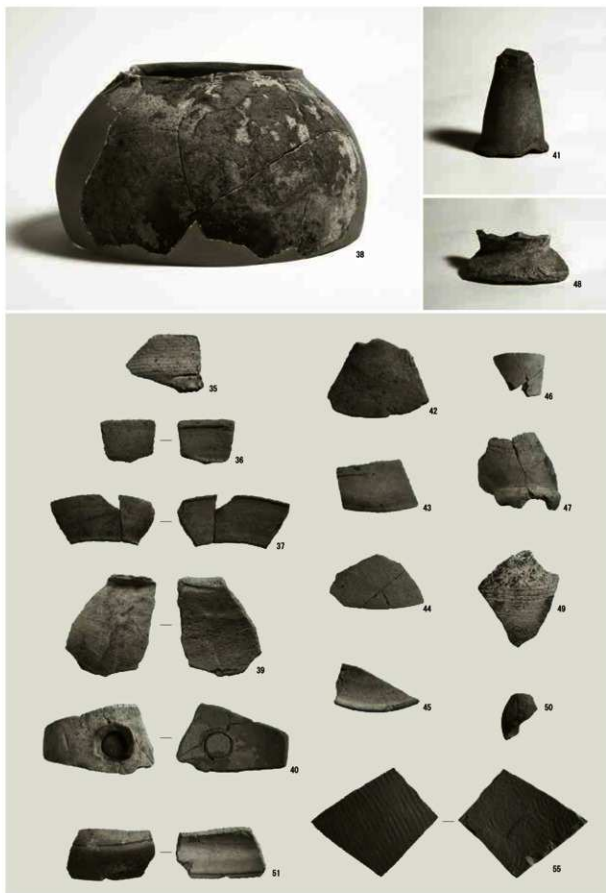
(2) SE 4 構築材



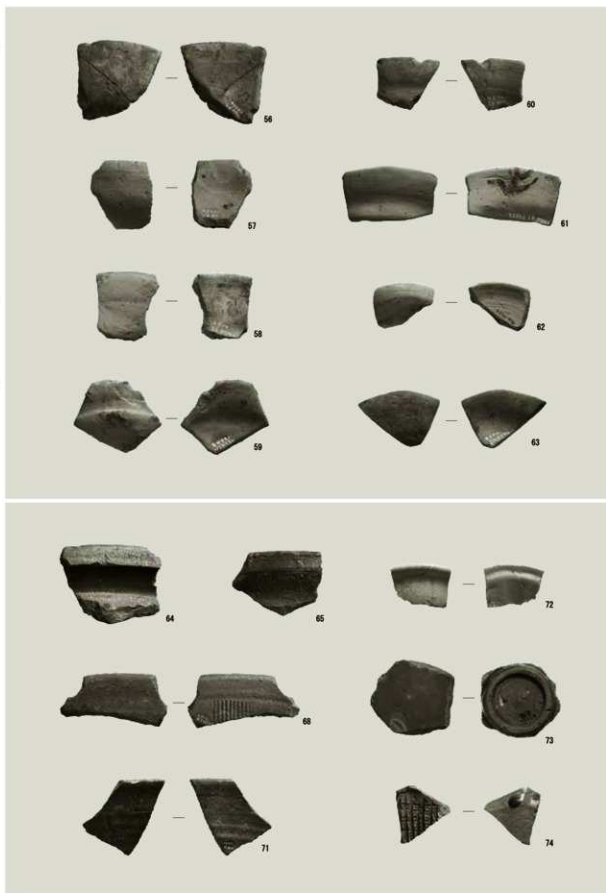
(1) SE 2~4 出土遺物



(2) 表土等出土遺物



(1) 表土等出土遺物



(1) 表土等出土遺物

報 告 書 抄 錄

[illegible]

福井県埋蔵文化財調査報告 第180集

北横地中才遺跡

— 北陸新幹線建設事業に伴う調査9 —

令和4年3月4日 印刷

令和4年3月14日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒918-8226 福井県福井市大畑町97-21-3

印刷 (有) 竹内印刷

〒910-0244 福井県坂井市丸岡町富田町1-5
